Interview② with Bignamini, Jader

ヤデル・ビニャミーニ
クラリネット奏者から指揮者へ転身

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

デトロイト交響楽団の音楽監督に就任

イタリアのオーケストラの、古き良き伝統を踏襲しているヤデル・ビニャミーニ。兄の音楽の教科書に載っていたクラリネットの写真にひとめぼれし、クラリネットを学び始めたという。19歳からボローニャ市立劇場などの歌劇場管弦楽団でクラリネット奏者としてオペラに接し、ローマのイタリア・フィルハーモニー・オーケストラで交響曲のアプローチを学んだ。21歳からは15年間ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団のクラリネット奏者として世界の一流指揮者たちと共演した音楽体験が、彼の指揮の根底に流れているのだ。2010年のマーラー・イヤーでミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響のマーラー作品のアシスタント指揮者を務め、2011年マーラー「交響曲第5番」を代役で振って正指揮者デビューしたビニャミーニは、コロナ禍の最中にデトロイト交響楽団の音楽監督にも就任した。

——昨年12月にベートーヴェン《第九》で就任披露コンサートをするはずでしたね。

「コロナ第2波を予測して9月に前倒しし、舞台上の制限人数が20人だったので、チャイコフスキー『弦楽セレナード』などの小編成プログラムを組みました。12月には50人まで緩和されたので、ベートーヴェン『交響曲第3番《英雄》』を演奏しました。コロナ禍では僕も5カ月間仕事がありませんでした。それでも舞台に戻れたのは早いほうで、もっと困難な生活を強いられている仲間がたくさんいます。デトロイト交響楽団は市の補助も手厚く、協力的でした」

——この交響楽団のエネルギーは、ほかのどこにも見られない特別なものだと言っていましたが、詳しく説明してください。

アメリカのオーケストラの音楽監督も務めることになり、ますます活躍の場が広がるビニャミーニ

「楽団員のレヴェルもすばらしいのですが、その上に、より良く演奏するための要求をして、嫌な顔をされたことがなく、常に貪欲に、新しい要求を待っているのです。そして、微笑みを浮かべながら演奏してくれます。その雰囲気は僕にとってもリラックスしたものになるのです。ホールの音響がすばらしいのも利点です。2018年6月に、当時の音楽監督だったレナード・スラットキンの代役でプッチーニ《トゥーランドット》(演奏会形式)を指揮して、2019年10月にマーラー『交響曲第4番』に呼ばれてすぐ、次期音楽監督に請われるほど化学反応が起こったようです(笑)」

デトロイト響とのヴィジョン

——2020年1月の次期音楽監督就任決定コンサートの映像でも、その様子が伝わってきました。いつも暗譜で指揮するのですか。

「交響曲はだいたい暗譜します。現代曲は、演奏機会が1回きりということも多いので、譜面を見て振りますが……。19歳のころからウインド・オーケストラを指揮していて、知りつくしている曲ばかりなので暗譜で振ることに慣れていますし、オーケストラを見て振れるほうが自由になれるのです。クラリネット奏者だったころに、指揮者に見てもらえるとうれしかった気持ちも覚えていますし(笑)。譜面を見ないと本当に耳を澄まして聴くのでいいのです。譜面を追っていると、その音が頭のなかで鳴ってしまう

ことがあるからです」

──元クラリネット奏者だったということは指揮者にとってどんなメリットがありますか。

「まず、オーケストラの楽団員上がりの指揮者はオーケストラのことがよくわかるので、問題点もすぐに発見できます。とくに管楽器奏者は、音楽といっしょに呼吸することに慣れているのが長所です。そして、楽団員の人間性、楽団内でだれが信頼できるのか、またオーケストラ全体としての動向など、直感で感じ取れるので、新しいオーケストラを振りに行くときになじみやすいです」

──これからこの楽団と、どういう方向に進んで行こうと思っていますか。

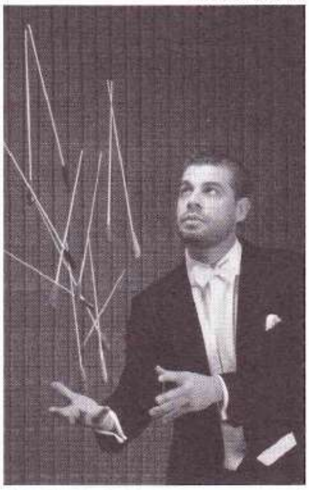
「まずは5月にMIDORI（五嶋みどり）とメンデルスゾーン『ヴァイオリン協奏曲』、オルリ・シャハムとベートーヴェン『ピアノ協奏曲第2番』、ハイドン『交響曲第104番《ロンドン》』を演奏する予定です。また、デトロイト・オペラハウスと初の共同制作でマスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》も上演します。私たちはコロナ禍でもストリーミングで定期会員を一人も失わずにすんだのですが、これはデトロイト交響楽団のデジタル・プラットフォームが10年前から存在しているからできたことです。これからは、劇場に戻って来てもらえるように努力していく段階に移っていくでしょう。ライヴ演奏を聴きたくても、最初はなかなか人混みで音楽を聴く勇気が出ない人もいると思います。ほかにも出張中の定期演奏会はオンラインで聴く、などストリーミングを活用し、両立させたサーヴィスを提供できればと思っています。アメリカはマーラーなど大編成の曲やフランス音楽が好まれるので、それらのレパートリーに加え、アメリカの現代作曲家の曲や、デトロイトの特徴と言えるジャズも取り入れたプログラミングを行っていきます。もともと100年の歴史と一流の音色を持っているので、将来的にはアメリカ屈指のオーケストラになるでしょう」

イタリアや日本でも

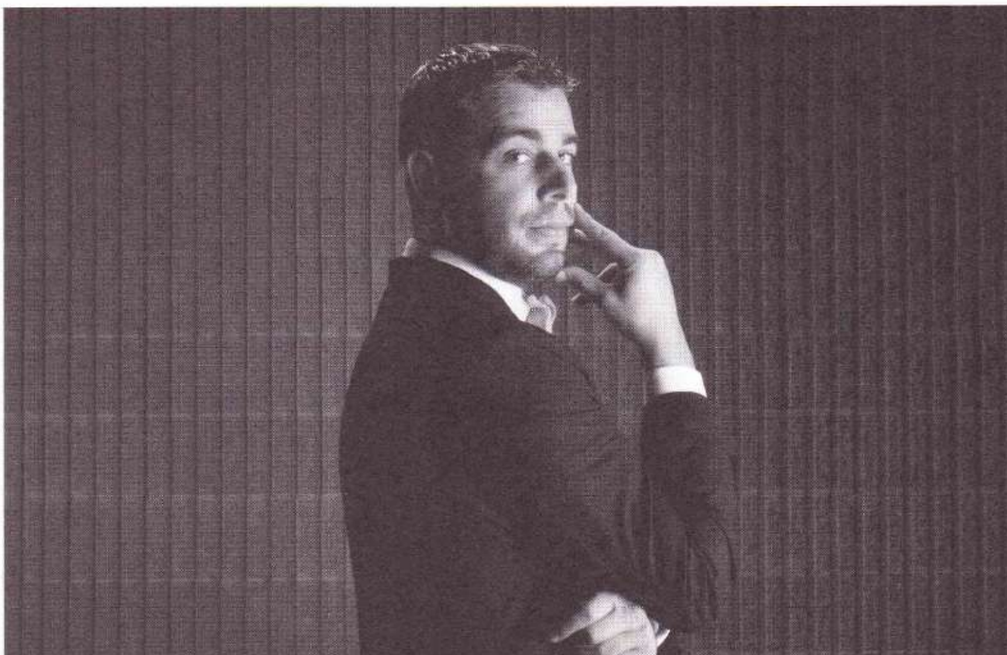
──デトロイトのほかではどのような予定がありますか。

「いまはフィレンツェでトスカーナ州立管弦楽団とのコンサートのリハーサル中で、ライヴ配信されます。ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団のレジデンス・コンダクターも続けていきます。日本にも1年に1度は行きたいです。昨年夏は仙台フィルハーモニー管弦楽団を振りに行くはずだったのですが……。妻や子供たちも日本の国民性に惹かれ、学ぶことも多く、大好きな国です。オペラのほうは、9～10月にトロントのオペラハウスで《運命の力》、ベルリン・ドイツ・オペラでも《シモン・ボッカネグラ》と、ヴェルディの大作を続けて振ります。そしていまはまだ発表できませんが、来シーズンにヨーロッパの大歌劇場でのデビューが待っています！」

©Stefano Buldrini



ヤデル・ビニャミーニ
1976年生まれ、イタリア・クレモナ出身。ピアチェンツァ音楽院でクラリネットを修める。1987年リッカルド・シャイーに認められ、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団に入団し、15年間クラリネット奏者を務めたあと、レジデンス・コンダクターに転身し現在まで同職。ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、ローマ歌劇場、バイエルン州立歌劇場等でのオペラ公演の成功と並び、2020年にデトロイト交響楽団の音楽監督に就任。



かつてはクラリネット奏者だったビニャミーニ。元楽団員ならではの視点でオーケストラと接する ©Stefano Buldrini